

マレーシアにおけるツーリズムの展開とオランアスリ社会 — キャメロンハイランド中間調査報告 —

Tourism and Orang Asli Communities in Malaysia:
A Preliminary Report of Case Study on Cameron Highlands

藤 卷 正 己

要 約

本研究は、英領マラヤ時代、1800年代末に英国の調査官によって発見され、また1930年代に茶園として切り拓かれた半島マレーシアのキャメロンハイランドにおいて、同高原を生活領域としてきたオランアスリのセマイ人（セノイ系）が、ツーリズムの展開に対してどのようなかわり方をしているのかについて言及するものである。

半島マレーシアの中央山地にあって、標高1500mの冷涼な高原としてのキャメロンハイランドは英領マラヤ時代から高原避暑地として広く知られてきたが、今日ではエコツーリズム、アグロツーリズム、エスニック（オランアスリ）ツーリズムが複合しあう空間（舞台）へと変貌をとげた。本稿では、「キャメロンハイランド・ツーリズム劇場」におけるアクターとしてのセマイ人が、オランアスリツーリズムにどのように関与しているのかについて、その概要が報告される。

Abstract

This study focuses on people of Semai, a subgroup of Senoi among Orang Asli, in Cameron Highlands, Peninsular Malaysia in order to investigate their correspondence to tourism.

This area, at 1500 meter's above sea-level among the peak of the main range of Peninsular Malaysia and with cool temperature, was 'discovered' by a British colonial government surveyor in 1885 and its fame then grew during the colonial era when British planters developed tea farms on the slopes of hills. The Highlands with a long history of hill resort nowadays has changed into the multiple spaces of eco-tourism, agro-tourism and ethnic (Orang Asli) tourism. In this report the author gives a sketch of the actual situation how Semai people

take part in and are involved in Orang Asli tourism as actor of “Tourism Theatre of Cameron Highlands”.

キーワード：オランアスリ、ツーリズム、キャメロンハイランド、マレーシア

Key words：Orang Asli, tourism, Cameron Highlands, Malaysia

1. はじめに

2007年8月31日に独立50周年を迎えたマレーシアでは、前年度来「Truly Asia Malaysia」・「Visit Malaysia 2007」キャンペーンが打ち出され、これまでに以上に外国人観光客の呼び込みに国をあげての取り組みが推進されてきた。あらゆる面で「ワールドクラス」をめざしてきた政府指導者は、ツーリズムを国内産業の育成、外貨獲得のためのみならず、マレーシアという国名を世界地図に刻印するための手段であると考えているからにはほかならない。

1998年にはマレーシアへの国外からの観光客数は550万人であり、製造業およびパームオイルの産業に次いで第3位の外貨獲得源の地位にあったが、2000年からはパームオイル部門を抜き第2位の外貨獲得部門となり、外国人観光客数も1277万人を数えた。2001年ニューヨークでの「9.11同時多発テロ」、2002年にはバリ島での爆破テロは世界のツーリズムに衝撃を与えたが、マレーシアのツーリズムは堅調さを示し、2002年の外国人観光客集客数は1330万人を数えた。しかし2003年から04年にかけて、ジャカルタでの爆破テロ、イラク戦争、SARS、鶏インフルエンザ、南部タイにおけるイスラーム過激派による反政府闘争の勃発は、この国のツーリズムブームに冷水をあびせた [NST: 29 November 2003]。とはいえ、その後、マレーシア観光局 (Tourism Malaysia) による世界各国への広報活動、エスニック、エコ、アグロ、メディカルなどさまざまな名称を冠した多様なツーリズムの打ち出しと、「自然豊かで・多様な民族文化を要し・治安がよく・物価が安く・施設が整備されており・英語圏の・穏健なイスラーム国であること」がマレーシアへの外国人観光客を引

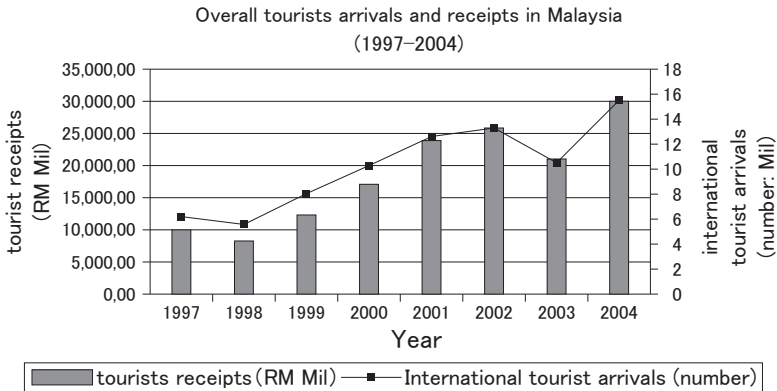


図1 マレーシアの外国人観光客の入込み客数の推移

出所：http://www.mima.gov.my/mima/htmls/papers/pdf/cheryl/

きつけ、その数は2004年末で1570万人にまで増大をみた（図1）。

また、さまざまなメディアを通じて「*cuti-cuti* Malaysia」（ホリディマレーシア）キャンペーンは、マレーシア国民に対してツーリズムへの参加を呼びかけている。それは単にツーリズム産業の発達がGDPを高め、結果として国民生活を豊かにするとの理由からだけでなく、国民統合政策の一手段として企図されたものであるとみてよい。すなわち、自然豊かで、多種多様な民族・言語・宗教集団や歴史的経緯を異にするさまざまな地域の歴史・文化から成り立っている世界に稀なる（ユニークな）「わが国」を国民に「再」発見させること（「ディスカバーマレーシア」）により、あらためて「マレーシア国民意識」の醸成を促すねらいもあることに留意すべきであろう。

他方、こうした国をあげての急激かつ広範囲に及ぶツーリズム促進政策が、マレーシアを構成する各地域・社会（階層やエスニック集団）に対して、どのような影響を及ぼしているのかについて関心が払われねばならないだろう。なぜならばツーリズムは空間を消費し、新たな空間を生産するプロセスであり、また労働市場の再編成に伴い人々の住まい方に、さまざまなかたちで影響を及ぼすからにほかならない。

本稿は、とりわけ現在のマレーシアにおいて「社会的弱者」、あるいは「周辺化されてきた人々 the marginalized people」¹⁾、「アンダークラス（最下層） the underclass」²⁾を成しているとみなされるオランアスリ Orang Asli 社会に焦点を定め、ツーリズムの展開によって同社会がどのように変貌をとげつつあるのか、またいかなる問題に直面しているのかについて検討を加えることを目的とした研究の中間報告である。なお本研究は、マレーシア科学大学人文学部地理学教室の Norizan Md Noor 氏と Tarmiji Masron 氏との共同研究の一部であることを付言しておく。

2. 研究の視点と研究枠組み

筆者は、社会地理学の立場から、ツーリズムとの脈絡の中でおおよそ以下のような3つのテーマあるいは視点からのマレーシア研究の可能性を考えてきた(図2)。

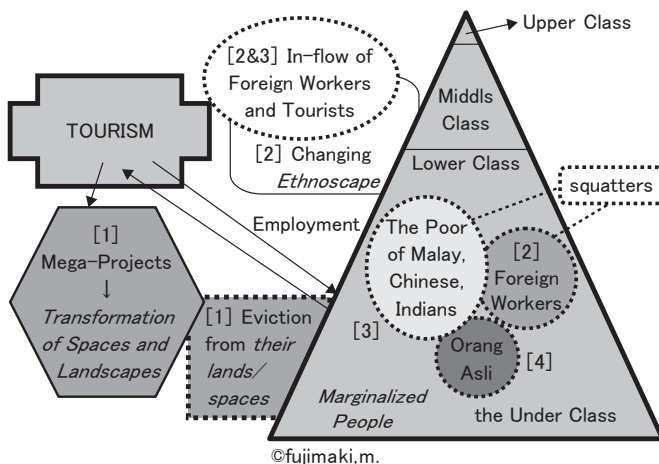


図2 ツーリズムをめぐるマレーシア研究の視点と枠組み

(注) 周辺の人々あるいはコミュニティがすなわち下層または最下層（アンダークラス）であるわけではない。

- ①グローバリゼーション下にあつてツーリズムと連動するメガプロジェクトによって引き起こされる空間・建造環境そして景観の再編成、そしてメガプロジェクトによって必然的に派生する住民の「彼らの」土地からの立ち退き（追い立て）にかかわる問題 [藤巻 1998 ; 2000a ; 2001 ; 2003 ; 2006]
- ②グローバリゼーションの拡大と深化によるトランスナショナルな人の流動と、それに伴うエスノスケープ *ethnoscape*（民族景観）³⁾ の変貌 [藤巻 2003 : 2007、Fujimaki 2003]
- ③ツーリズムにともなう社会経済変動とツーリズム産業に組み込まれてきた（あるいは組み込まれつつある）社会的弱者（周辺化された人々／アンダークラス）の生活実態の変化や彼らが所属するコミュニティの変質

上記③については、筆者はこれまで都市スコッターおよび外国人労働者に関する議論の中で若干、言及したことがあるが [藤巻 2001 ; 2003 ; 2006]、本稿ではマレー半島の先着・先住少数民族集団であるオランアスリとツーリズムとのかわりについて検討を加えるものである。

3. 周辺的社会集団・最下層としてのオランアスリ

(1) オランアスリとは誰か

オランアスリとは、セノイ *Senoi*、ムラユアスリ *Melayu Asli*（原マレー *Proto Malay*）、ネグリト *Negrito* の 3 グループおよび18のサブ・グループから成る半島マレーシアの先着・先住民族集団の総称であり（図3）、オランアスリの保護と主流社会の統合を目的として1961年に JHEOA（オランアスリ局：*Jabatan Hal Ehwal Orang Asli*= Department of Orang Asli Affairs）が設立されてから、彼らを「オランアスリ」と呼称することが定められた⁴⁾。JHEOA の調べによると、オランアスリの人口は2004年現在、14万9723人を数え（表1）、半島マレーシア全人口の約1%の割合でしかない。

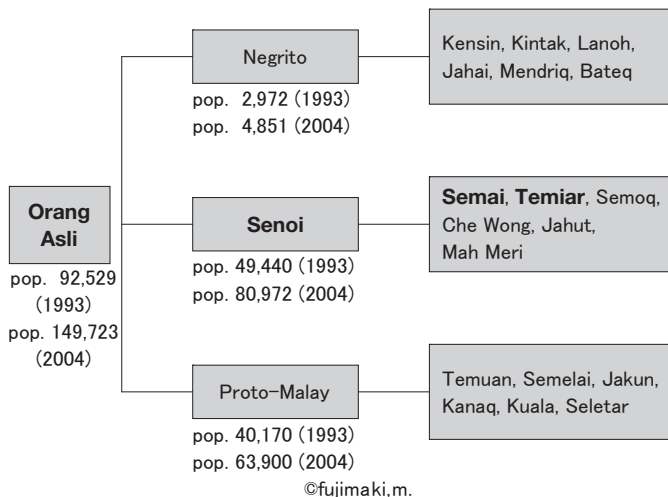


図3 オランアスリを構成するエスニック集団

オランアスリは、中央山地を州域内に有すパハン州（5万5734人、37.2%）、とペラ州（4万7945人、32%）に多く分布し（図4）、これら2州だけでオランアスリ全体の69%の割合を占める（表1）。グループ別にみた場合、8万972人の規模を有すセノイ系が最大の集団であり、全体の54%を占める。ムラユアスリ系は6万3900人で43%、ネグリティ系はわずかに4851人の3%でしかない。セノイ系はペラ州、パハン州などの半島中央山地部に多く分布し、「山の民」として知られてきた。またムラユアスリ系はパハン、スランゴール、ヌグリスンビラン州など半島中央部から南部にかけての広範囲の地域を原郷とし、ネグリティ系は北部のペラ州とケランタン州の山間部に分布している。

このように約840を数えるオランアスリ村の多くは、山地や海辺の密林内部の遠隔地か縁辺部（プランテーションなどの開発地域との境界付近）に点在しているが、近年では低地密林地域における各種開発、そして都市化・都市地域の拡大により結果的に都市地域内部に取り込まれつつある〔藤巻 2006〕（図5）。

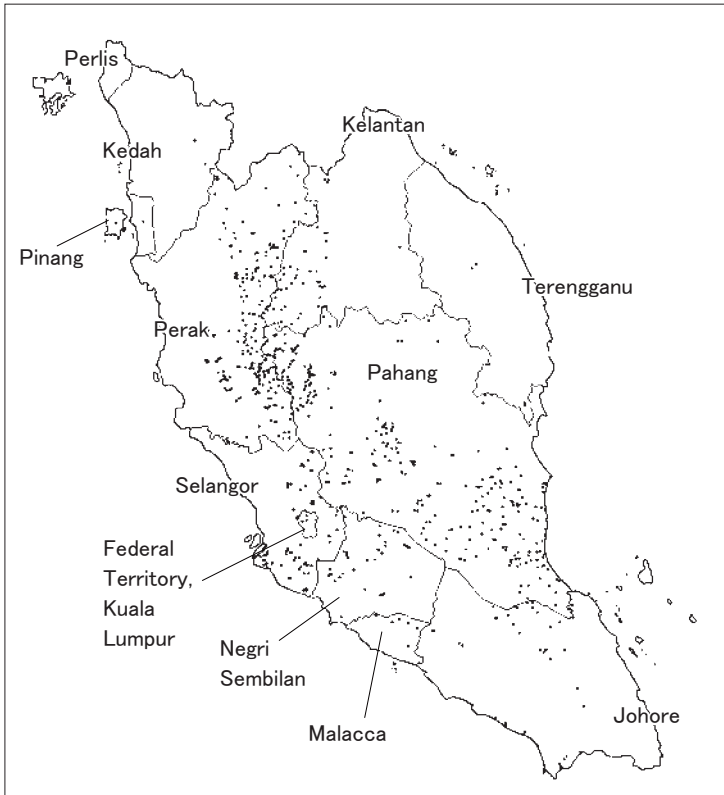


図4 オランアスリの分布（1990年）

出所：Jabatan Perangkaan Malaysia [1997] を修正。

（注）1 ドットはオランアスリ100人を表示。ちなみに、本図は伝統的なオランアスリ村の分布そのものを示すものではない。

(2)最下層に組み込まれたオランアスリ

オランアスリは、マレーシア政府による保護政策の対象集団とされてきた。一つには半島マレーシアにおける先着エスニックマイノリティとして、である。すなわちオランアスリは、1954年から現在の JHEOA の前身である原住民局の設置に伴い、また1961年には「原住民法」から「オランアスリ法」への法の改

表1 オランアスリのグループ別／州別人口分布：2004年

(単位：人)

State	Senoi	Negrito	Melayu Asli	Total
Kedah	0	232	0	232
Perak	45,092	2,133	720	47,945
Selangor	3,758	0	10,403	14,161
Negeri Sembilan	37	0	8,211	8,248
Melaka	23	0	1,385	1,408
Johor	3	0	11,393	11,396
Kelantan	8,820	1,098	0	9,918
Terengganu	653	28	0	681
Pahang	22,586	1,360	31,788	55,734
Total	80,972	4,851	63,900	149,723

(出所) JHEOA 内部資料による。

正に伴い「原住民 Aborigines」から「オランアスリ Orang Asli」への集団名称の変更がなされるとともに、彼らの社会的経済的地位の向上、(オランアスリ以外の)他のコミュニティとの統合、①教育、②公衆衛生、③経済、④住宅および一般福祉、⑤治安、⑥インフラの整備・開発などの改善政策を受けてきた。そして、これらの施策をより効果的に実現するために(との名目により)オランアスリ村を遠隔の密林地帯からその縁辺部(プランテーション開発地域との境界付近)へ、あるいは山地から平地へ再定住させるための計画が進められてきた(図5)。こうしたJHEOAを通じたプロジェクトは、水道・電気など基礎的アメニティの供給を伴う住居の改善、児童に対する就学機会の保障など、さまざまなかたちで彼らの生活のあり方を根本から変えつつ、社会経済生活の近代化を促す、いかえれば「密林の民」から「平地の民」への転換を図るというものであった。

しかし皮肉なことに、JHEOAを通じた主流社会へのオランアスリ統合政策は結果として、これまで主流社会とは無縁の生活世界を送ってきたオランアス

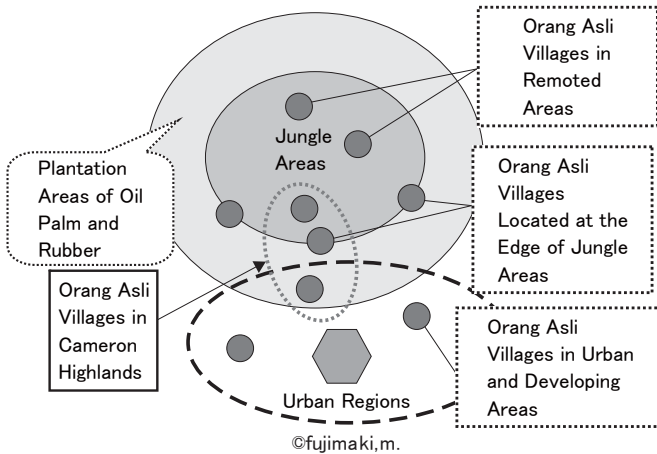
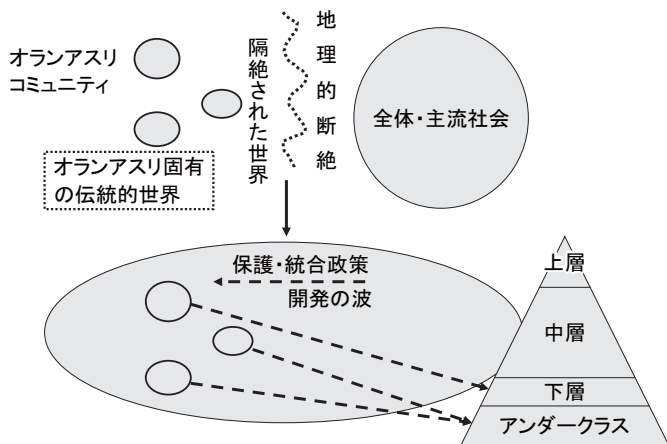


図5 オランアスリ村の立地類型概念図

「密林の民」であったオランアスリ社会は、その地理的位置から以下のように3つのタイプに大別できよう。①密林内部の遠隔地、②拡大するプランテーション開発地域との境界付近、③拡大する都市部あるいは開発地域の周辺部。キャメロンハイランドのオランアスリ社会は、キャメロンハイランド自体が都市部から見た場合、遠隔地に位置するが、ツーリズムなど開発が進んでいるキャメロンハイランド域内においては、後述するように(a)河川沿い奥地の未開発地域、(b)準開発地域、(c)開発地域という3タイプが考えられる。

りを全体社会の中において経済社会的に下層あるいは最下層、周辺の状況に位置づけさせることとなった(図6)。そして、1990年代以降の開発計画やメガプロジェクト、さらにツーリズムの拡大により彼らの生活領域・生活世界は蚕食されることとなり、オランアスリとしての固有の生活文化の存続も次第に危うくなりつつある[藤巻2006]。

他方、上記のように主流社会へ統合、開発経済に合流させられたオランアスリは政策上、極貧層 the hardcore poor あるいは特別目標集団 special target group⁵⁾ の一つとしてみなされることとなった。連邦政府によって、半島マレーシアでは平均世帯月収がRM460(貧困線)未満の世帯は貧困層、その半分のRM230未満の世帯は極貧層(貧困撲滅の対象層)の一つとして定義されてい



全体社会に包含されるオランアスリ社会

図6 オランアスリ社会と全体社会との関係概念図

オランアスリ社会は山地部・海岸部の密林地域にあって、1950年代まで平地の全体・開発社会とは地理的に隔絶された固有の世界を築いてきた。しかし、政府の保護政策の対象集団となり、あるいは開発地域の拡大によって全体・開発社会に組み込まれていくに従い、オランアスリ社会は全体社会の底辺に位置づけられることとなった。

るが、2001年の新聞報道によれば [NST: April 14, 2001: Orang Asli homes ready in October]、オランアスリ社会にあって世帯月収 RM460 以下の貧困世帯比率は81%、さらに生活保護対象となる世帯月収 RM230 以下の極貧世帯比率は46%にも及んでいるものと推定されている（2007年8月現在、RM1=約30～35円）。マレーシア経済の急成長に伴い、半島マレーシアの貧困世帯比率が1970年で49.3%であったのが、1987年6.1%、そして2002年には5.1%へと着実に減少したことを考えれば、いかにオランアスリの経済水準が絶対的に劣位にあるかが明らかであろう。

そこで政府は、オランアスリに対して現金収入獲得の契機を与えることにより貧困状態から脱却させ、加えて外部者との接触・交流を通して、主流社会・開発経済への統合を促進しようとしている。たとえば、職業機会が限られている山間地などでは、「貧困克服のためのツーリズム」[高寺 2004] への参加を呼

びかけている。

しかし、そうした構想がどのように、どの程度具体化されているのか。また、ツーリズムの展開が彼らの暮らしや生活観にどのような影響を及ぼしているのか、さらにオランアスリが生存戦略としてツーリズムを能動的に取り込んでいるのか否かについて、その実態は十分に明らかにされていない。

次章では、キャメロンハイランドのオランアスリ社会を事例として、以上の諸点について瞥見してみることとする。

4. ツーリズム空間としてのキャメロンハイランド

キャメロンハイランドは、パハン州北西部、ペラ州およびケランタン州との境界付近に広がる標高1000～2000m 台の山々に囲まれた高原である。その地域名称は、1885年にこの地を「見出した」英国人調査官のキャメロン W. Cameron の名に由来する。同高原は避暑地として、また茶園として切り拓かれ、今日では半島マレーシア有数の観光地としてマレーシア国内外によく知られている(写真1)。

8月の学校休暇の週末、さらに中国正月など祝祭日の時期ともなれば⁶⁾、麓の町タパー Tapah から急峻な山道やイポー Ipoh 付近からの新ルートを使って、数多くの観光客が自家用車、大型観光バスを連ねてやってくる。ナンバープレートを見るとマレーシア国内だけでなく、シンガポールやタイからのツーリストが多いことに気づく。また同高原は日本人など外国人ツーリストの間でも知名度が高く、クアラルンプール国際空港から大型リムジンタクシーで5～6時間かけてキャメロンハイランドに直行したアラブ人の家族が、高級ホテル前に降り立つ姿も目にすることができる。

キャメロンハイランドの主たる観光資源は、冷涼な気候、斜面地を覆いつくすかのように広がる茶畑、野菜園・イチゴ園・サボテン園などの観光農園、バタフライガーデン、「オランアスリ村」、密林のトレッキング、ゴルフ場などで



写真1 キャメロンハイランド・Boh Tea Firm (2007年1月7日)

表2 キャメロンハイランドの土地利用面積の推移：1947～97年

	1947	1966	1974	1982	1990	1997
森林	95.0%	78.0%	76.0%	73.0%	72.0%	62.0%
耕地	1.7%	3.8%	3.8%	9.3%	10.2%	17.8%
茶畑・果樹園	2.7%	10.8%	10.8%	9.7%	9.5%	7.5%
都市的（含、住宅）	0.6%	9.4%	9.4%	8.0%	8.3%	12.7%

出所：Norizan and Suriati [2004]

ある。いいかえれば、同高原はこれまでのリゾートツーリズムに加えて、アグロツーリズム、エコツーリズム、エスニックツーリズム（すなわちオランアスリツーリズム）など多様なツーリズムが複合しあう空間として開発されてきた。そして、近年では日本人シニア層の長期滞在地としても知られている。

こうした複合的なツーリズム空間の形成は、キャメロンハイランドの土地利用を大きく変貌させた。すなわち表2にみるように、1980年代以降、とりわけ

90年代に入ってから森林面積の割合が減少し、耕地や都市的土地の利用面積が増大するという急激な変化がみられるに至ったのである。耕地の割合の上昇は野菜の露地栽培やハウス栽培の拡大を（写真2・3）、また住宅を含む都市的土地利用の面積割合の増大はロッジやホテル（写真4）、長期滞在者向けのアパートなどの宿泊・住宅施設の増加などを示唆するものである⁷⁾。

キャメロンハイランドの中心集落はタナラータ Tanah Rata であり、南北に伸びる幹線道路沿いにバスターミナル、ホテル、レストラン、土産物店、銀行、旅行代理店などが軒を連ねている（写真5）。またその周辺にはキャメロンハイランド郡の役所、警察署、消防署、郵便局、農業試験センター、電力会社そして中学校などの公的施設などが集積している。タナラータに次ぐ町は、山道をさらにあがったところに位置するブリンチャン Bringchang であり、ここにもホテルやレストラン、土産物店などの商店が立地している。このほかにタナ



写真2 キャメロンハイランドに広がる野菜園（2007年1月8日）

白くみえるのはビニールハウス。



写真3 野菜市場の観光客（2007年9月9日）

土日・祝日のベジタブルマーケットは、新鮮な高原野菜や果物・花卉を求める観光客でにぎわう。これらの産物はキャメロンハイランドの沿道各所に設けられている市場のほか、観光農園直営店でも購入できる。低地の暑いところでごす地元民ツーリストにとって、冷涼な気候と新鮮な野菜やイチゴなどの果物がなによりの土産となっている。



写真4 キャメロンハイランドの高級ホテル（2007年1月8日）



写真5 タナラータ（2007年1月7日）

タナラータはキャメロンハイランドの中心町である。郡役所などの政府系機関、農林試験場、軍隊の駐屯地などの公的機関、銀行、オフィス、商店、ホテルなどの宿泊施設、火鍋（スチームボート）店などのレストラン、旅行代理店、バスのターミナル、市場、中高等学校が集まる。街道をはさんでショップハウスが並ぶ小さな町だが、オランアスリはじめ、マレー人・華人・インド系地元民のみならず、国内外からの観光客そして休日ともなれば外国人労働者が集まってくる。

ラータより南、キャメロンハイランドの玄関口にあたる場所にリングレット Ringlet、またプリンチャンの北に位置する峠の集落キーファーム Kea Farm、そこより山道を下ったところにカンボン＝ラジャ Kampung Raja という小さな町が位置する。これらの集落は小規模ながらも民族的多様性に富み、同高原の本来の住民たるセマイ人のほかに、人口の多数を占める華人、マレー人、インド系の地元民に加えて、外国からの観光客や近年、急増しつつあるインドネシア、バングラデシュ、ベトナムなどからの出稼ぎ労働者が民族的景観を独特のものにしている。とくに観光シーズンや週末ともなると、繁華な街に一

変するタナラータやブリンチャンあるいは各所の観光スポットは、濃密な多民族的空間と化す。

5. キャメロンハイランドのツーリズムとオランアスリ社会

(1) キャメロンハイランドのオランアスリ社会

キャメロンハイランドを生活領域としてきたオランアスリは2001年現在、4275人を数え、セノイ系のセマイ Semai 人が96%を占め、残りはトゥミアル Temiar 人である。同高原全人口（2000年現在、約3.5万人）の約12%を占めていることからもうかがわれるように、オランアスリはこの地域においては絶対的少数集団ではない。実際、タナラータの近くに位置するカンボン＝スンガイ＝ルイル Kampung Sungei Ruil の住民が強調するように、「この村は、英領時代からすでに現在地に所在していた」のであり、この地はセマイ人のテリトリーにほかならなかったからである。

カンボン＝スンガイ＝ルイルは、キャメロンハイランドにおけるオランアスリ社会の中心村であり、同地域を管轄する JHEOA の支部が設置されている。人口規模の上でも他の集落を圧倒し、同高原のオランアスリ人口の四分の一（約1100人）を占める。JHEOA オフィスをはじめ、同村の諸施設は平地の広場を中心に設けられているが、セマイ人が暮らす高床式の住居はルイル川沿いの三方に広がる斜面地に点在しており、その様は壮観ですらある（写真6）。降雨のとき雨水が流れ下るであろう斜面地には上水道のビニールパイプが這い、トタン葺きの屋根の上にパラボラアンテナを付けた家々が目視できる。簡易トイレであろう小屋もあちこちにみられる。

同村には JHEOA 支部のほかに、幼稚園や僻地のオランアスリ村の中学生向けの寄宿舍、診療所が開設されている。また集会所や公衆電話も設けられている。さらに、多くの住民がムスリムに改宗していることを物語っているように、村の入り口にはイスラーム礼拝所（スラウ）もある。ちなみに、JHEOA 前の広

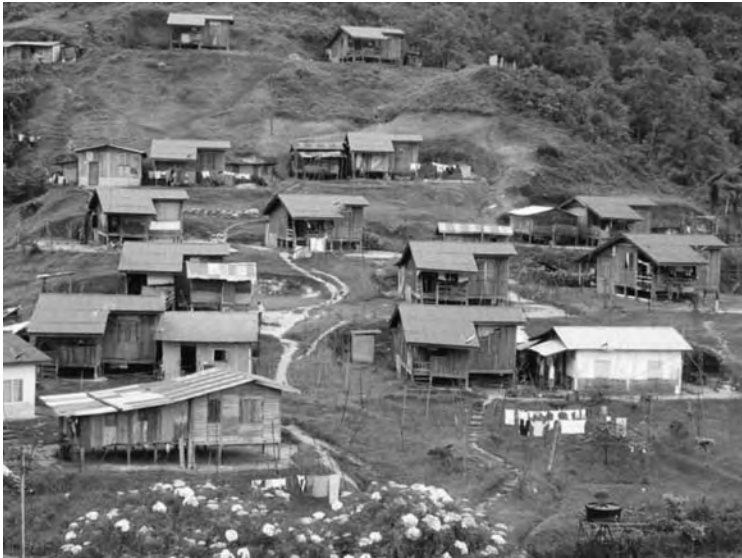


写真6 キャメロンハイランドのオランアスリ村 Kg.Sg.Ruil の風景
(2007年1月8日)

場に面したところで雑貨屋を営んでいる村長（バティン Batin：オランアスリの伝統的首長）の氏名はムスリムであることを示唆している。

カンボン＝スンガイ＝ルイルのほか、同高原にはオランアスリ村は26を数えるが（図7）、いずれもペラ州との州境近くを南北に、リングレット～タナラータ～プリンチャン～カンボン＝ラジャの町を貫通する幹線道路からの山道をくだった、西から東に流れる河川沿いに位置する。計27村のうち、カンボン＝スンガイ＝ルイルをはじめとする4村は町の近くに位置していることから、現金収入を得る機会が多く、また JHEOA の支援によって整備の進んだ開発村となっている（写真6・7）。それらのほか中心集落から河川沿いに数キロメートル山道を入った6村は準開発村としてみなされるが、河川下流の密林深奥地に位置する17村は未開発なままであるといわれている [Norizan and Suriati: 2004]。

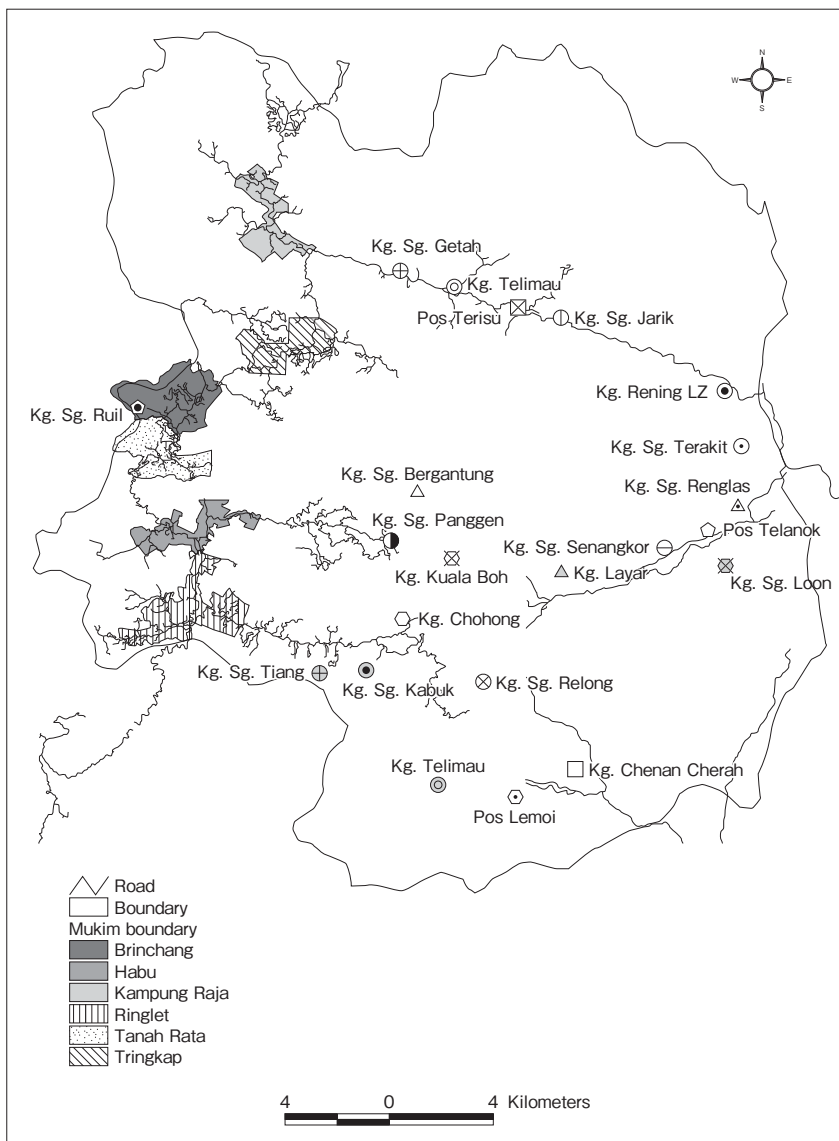


図7 キャメロンハイランドのオランアスリ村の位置

(Tarmiji Masron 作成)

(2) キャメロンハイランドのツーリズムとオランアスリ社会

① オランアスリの経済活動

外部者、とりわけツーリストとの接触する機会があるカンボン＝スンガイ＝ルイルなど3村の住民166人にインタビュー調査をした Norizan と Suriati [2004] によれば、オランアスリの主な職業としては、71%が JHEOA などの公務員や公営企業の職員、またはホテルの従業員や、タナラータなどの町の商店や屋台で就業する賃金労働者である。29%は農業、密林での狩猟・採集あるいは商店主をしている。公務員の場合、月額 RM1000～1200 の給与を得ることができるが、全体の70%が RM600 以下の収入にとどまっているという。

筆者によるカンボン＝スンガイ＝ルイルの JHEOA 職員へのインタビューからは、同村の住人の多くは JHEOA などの政府機関、村の入り口付近に位置している国営企業の電力会社 Tenaga Nasional やゴミ収集・衛生部門の企業である Aloma Flora の職員として勤務しており、おおむね月収 RM1000～1200 を得ているという。キャメロンハイランドのオランアスリ社会では経済的に安定した村であることがうかがわれる。

ところで、オランアスリはツーリズム産業とどのようにかかわっているのだろうか。町のホテルや食堂、土産物店など商店や市場での従業員、またアグロツーリズムとのかかわりで言えば、農園労働者や野菜市場での販売員、さらにゴルフ場のキャディ、トレッキングのガイドなど多種多様である。

では、現金収入の程度はどのくらいか。ホテル従業員の場合、月収 RM800 であるとの回答を得ている（ちなみにペナンの中級ホテルのベルボーイの月収は RM1200 である）。このほか、オランアスリの青年が携わっている仕事として、ゴルフ場のキャディを例にとりあげることができるが、その場合、18ホールのアテンドにつき RM20、地元の旅行業者との提携によるトレッキングのガイドの場合は1件につき（人数次第で）RM20～100の現金収入を得ることができるという。

なお子供たちについても、ツーリストとのかかわりにおいて現金を得る機会

がある。たとえば、ゴルフ場で池やクリークに落ちたボールを回収し1個RM1でゴルファーに売ったり、村を訪れてきたツーリストから小金をもらったりすることがあるという。RM1も出せばコーヒーや紅茶、缶入り飲み物を買うことができ、RM2でロティチャナイやナシレマクなどの軽食もとれるマレーシア社会では、ゴルフボール拾いは子供にとって貴重なこづかい稼ぎになる⁸⁾。

オランアスリ村の所在地付近の蔬菜や（日本にも）花卉を生産・出荷している農園では、住民が農業労働者として雇用されている場合もあるが、単純労働かつ朝食・昼食付きとはいえ、時給RM1（約30～35円）というわずかな収入しか得られない。これに対して、インドネシアやバングラデシュ、ベトナムなどからの外国人労働者の場合、雇用主曰く「よく働くし、農業技術もある」との



写真7 オランアスリ村：Kg.Sg.Getan（2007年1月9日）

幹線道路から6kmほど川沿いに入った準開発型オランアスリ村。

水道・電気などの基礎的アメニティが整備されている。川沿いの周囲には野菜農園が広がっている。集落前の簡易舗装の1車線幅の道路を肥料や農薬、収穫物を積んだトラックが行きかう。

理由から月給 RM800 が支給されている。こうして、少なくとも農園の拡大やアグロツーリズムの展開は、必ずしも地元民たるオランアスリの経済状況を好ましいものにする契機となっていない。むしろ、外国人労働者の流入がオランアスリの仕事を奪っている上に [NST: May 17, 2004: Foreigners depriving them of jobs; NST: July 28, 2004: Orang Asli feeling the pinch as foreign workers cash in]、耕地面積拡大のための森林伐採や、農園農薬・肥料の投入による河川の汚染は、オランアスリの伝統的生活領域を脅かしつつある。

②オランアスリ・ツーリズムとオランアスリ・ビジネスの可能性

JHEOA は近年、キャメロンハイランドのオランアスリの外部社会との接触の機会や収入獲得の契機をふやすべく、彼らのツーリズムへの参入を促そうとしている。たとえば、1994年にプリンチャンの広場にクラフトセンターを開設し、オランアスリの手になる手工芸品の販売を行うようになった。オランアスリに伝統的な日用品や工芸品を制作させ、ツーリズム市場に結びつけようとする政策である。また、JHEOA はカンボン＝スンガイ＝ルイルで「アスリロッジ Asli lodge」（1泊 RM30）を数室、経営している。

他方、タナラータなどの町に近く、車で容易に訪れることができるオランアスリ村は、茶園・イチゴ園・野菜市場・滝などともに、重要な観光スポットとして観光地図やパンフレットに明示されており（図8）、オランアスリ村訪問ツアーが商品化されている（写真8）。たとえば、ツーリストは半日コース RM80 の料金を支払ってバンに乗り、観光業者と提携関係にあるオランアスリ村を訪れ、村人のガイドに案内されて山道をトレッキングする（写真9）。ときには、狩猟用の吹き矢を RM20 で吹かせてもいる。ツーリストが村の子供に小銭を渡す場面もあるようだ。

さらに、オランアスリ自らが幹線道路沿いで仮設小屋を建て、自家用車や観光バスで往来する観光客に、密林で採集してきたドリアン・蜂蜜・たけのこ・プタイ（*petai*：苦味のある長枝豆）・トンカットアリ（伝統的に滋養強壮に薬



図8 キャメロンハイランドの観光マップ



写真 8 オランアスリ村観光（2007年1月8日）
カンボン＝スンガイ＝ルイル

効があるとされてきた木の根）などを販売し、日銭を稼ぐ光景があちこちで見られるようになった（ドリアン RM4、プタイー束 RM5: 月収 RM200 前後）（写真10）。また、キャメロンハイランドの事例ではないが、高原の麓を走る高速道路沿いのパーキングエリアでは、手工芸品、トンカットアリなど密林で採取した薬草木の錠剤、蜂蜜などの物産店がオランアスリの女性たちによって運営されている。こうした「オランアスリ・ビジネス」とでも言うべき新たな動きが出てきたことは注目される。

③オランアスリ・ツーリズムをめぐる問題

以上に粗描してきたように、ツーリズムはオランアスリに対して、多様な職業機会や低学歴で貧困な人々でも参入することのできる現金収入獲得手段を生み出しつつある。



写真9 オランアスリ村観光(2007年8月26日)

オランダ人一行が旅行代理店のスタッフに案内され、オランアスリ村を見学。この村の母村は背後の山腹斜面地にある。幹線道路沿いに村人の一部が下りてきて生活をしている。ツーリストは、村の見学後、村の若者に案内され、背後の母村までトレッキングを行う。吹き矢を実体験するオプションサービスもある。

近年、オランアスリの伝統的な暮らし方を破壊することなく、収入機会をつくりだすため、彼らの生活実践の中で継承されてきた技能や生活の知恵を活かし、伝統的な住まい方を保持させながら、オランアスリ村をツーリスト・スポットとするようなオランアスリ民宿観光構想やエコツーリズム構想が浮上してきている [NST: October 13, 2003: Call to retain traditional features; NST: January 4, 2004: Making good use of Orang Asli skills; NST: March 12, 2004: Bed and breakfast with the Orang Asli; Star: January 31, 2004: Protect indigenous traditional knowledge]。

こうしたオランアスリの生活文化のみならず、彼らそのものを観光対象化



写真10 オランアスリ・ビジネス (2003年11月23日)

キアメロンハイランドと麓のタパーを結ぶ幹線道路沿いに、オランアスリの人々が小屋がけをして、密林で採取してきたプタイやトンカットアリの原木、蜂蜜、ドリアンなどを販売している。子供の通学、オランアスリ・ビジネスなど生活の利便性をはかるため、背後の山・谷から観光道路沿いに住居を移すオランアスリがふえつつある。

(「観光オランアスリ」の出現!)、商品化する「オランアスリ・ツーリズム」は、オランアスリ社会自らの内発的な構想というよりも、州政府やJHEOA、トラベルエージェントを含むツーリズムセクター、そしてNGOなど外部的働きかけが主となっていることが多い(図9)。こうしたオランアスリ自体が、そして彼らの生活文化や生活世界が観光資源・商品化され、ツーリストとの接触の機会が増えてきている状況に、住民はどのような感情を抱いているのだろうか。

タナラータに近くに位置し、ツーリストマップに観光スポットとして所在地が紹介されているカンボン＝スンガイ＝ルイルの住民(男性/30歳代)は、観光客が自村を訪れることを「ハッピーである」と歓迎している。また、道端で

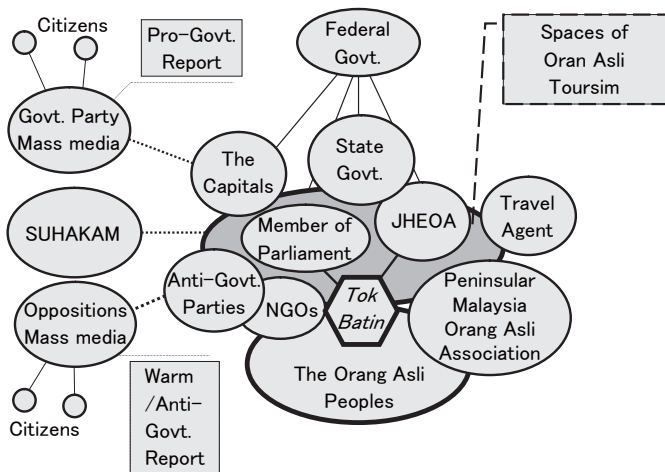


図9 オランアスリ・ツーリズム空間をめぐる諸アクターの関係構成概念図

ドリアンとプタイを売っていた青年によれば、「車で行き来する観光客との出会いや会話は楽しい。自分はだからあまりお金にならなくても（2～3週間で約RM100）、気が向けばここへ出てきてドリアンやプタイを並べている」と語る。

Norizan と Suriati [2004] によれば、回答者の86% はツーリストの流入に「幸せである・刺激をうける」、15% は「いらだちを覚える・日々の生活が脅かされている」という。また回答者の54% はなんらかのかたちでツーリズムにかかわっており、それが利益を生み出していると感じているが、45%の人々はそれが彼らの生活を目立つほどに向上させてはいないとしている。

さらに大多数の人々にとって彼らを取りまく深刻な問題は、生活の基盤となってきた森林の伐採がもたらす弊害や若い世代における伝統的技術の喪失であるという。

6. おわりに

オランアスリは英語で“original people”を意味し、文字通り先住民族を主張するマレー人よりも早くマレー半島に先着した”the First Malaysian”であるにもかかわらず、1950年代まで主流社会の発展とは無縁な生活世界を追求してきた結果、今日、政治経済・社会的に底辺／周辺の状況に置かれているという意味で“the Last Malaysian”とみなされてきた。こうした状況に対して、オランアスリの人権や尊厳の回復をめぐる議論が沸騰しつつある〔Nicholas 2000: 2004; NST: January 5, 2000: Orang Asli: The first Malaysians, not the last; 藤巻 2006〕。ツーリズムとオランアスリとの関係性にかかわる論議においても、彼らの生活水準の向上や社会経済的地位の向上のみならず、人権と尊厳とのかかわりという視点からのアプローチが重要であることはあらためて述べるまでもない。またオランアスリをとりまく諸アクター（図9）、とりわけJHEOAやトラベルエージェント、そしてバティンなどオランアスリ社会におけるリーダーの役割について探求すべきであろうし、オランアスリ・ビジネスにみるような彼ら自らの生存戦略の試みについて検討を加えねばならないだろう。今後の調査研究課題としたい。

註

- 1) ここでいう周辺化された人々とは、人口統計などにおいてブミプトラ *Bumiputera*（マレー人およびその他先住民族）、華人、インド系という「多民族社会マレーシアを代表する三大種族」以外の、統計上「その他」として括られてきたポルトガル人、ババ *Baba*、ニョニヤ *Nyonya*、パンジャブ人などマレーシアにおいて絶対的少数民族集団そのものを指すものではない。三大種族および「その他」エスニックマイノリティを問わず、マレーシア社会において政治・経済・社会・文化的に「主流」社会から排除されたり、看過・忘れられてきたりしてきた人々 *the forgotten people* や集団を意味している。
- 2) 本稿では、便宜的にマレーシア政府が「極貧層」として定義している都市貧民やオランアスリなどを、現代マレーシアにおけるアンダークラスとみなしておくこととする。ちなみに都市貧民にはホームレス、公有地などの「無断」居住民であるス

クォーターや低価格高層フラットに再定住した元スクォーターの一部などが含まれる。これらに加えて、筆者は不法入国・不法就労・不法滞留している外国人出稼ぎ労働者を加えるべきではないかと考えている。

- 3) 「エスノスケープ」とは、人類学者のアルジュン・アパデュライ A. Appadurai による造語である〔アパデュライ 2002 〈1990〉〕。アパデュライによれば、「エスノスケープとは、今日の変転する世界を構成している諸個人のランドスケープのこと」であり、トランスナショナルな移動者である旅行者、移民、難民、亡命者、外国人労働者などが構成するフローとしての、可視化された民族的景観、さらには外国人労働者やツーリスト自身による経験が造影する心象風景を意味しているものと解される〔藤巻 2007〕。
- 4) それ以前は「原住民 Aborigines」と呼ばれた。1954年に「原住民法」(Aboriginal People Act 1954) が制定され、JHEOA の前身である原住民局 Department of Aborigines が設置されたことによる。
- 5) オランアスリのほか、マレーシア政府が極貧層 (the hardcore poor) あるいは貧困撲滅の特別目標集団 (special target group) として定義しているのは、零細ゴム農園主、稲作農民、サバ州の(焼畑)移動耕作民、サラワク州のサゴやし生産者、漁民、ココナツ零細農園主、農園労働者、新村華人住民、そしてホームレスやスクォーターなどから成る都市貧民である〔NST: August 1, 2000: Good intentions alone just not enough in all-out war on poverty〕。
- 6) 8月および中国正月の頃がハイシーズンとなるキャメロンハイランドでは、とくに週末ともなるとホテルやロッジ、アパートの室料はオフシーズンの倍にまではねあがる。
- 7) キャメロンハイランドでは、一見、過剰供給気味ともみえるアパートの建設ラッシュが印象的である。しかし、日本人長期滞在者によれば、シンガポール人やマレーシア華人を意識した投機的建設のほかに、日本の旅行代理店による「団塊の世代」の受入れプロジェクトが後押ししているのではないかという(2007年1月8日の聞きとり調査による)。
- 8) Webで公開されている「キャメロンハイランド体験記」的ブログなどでも、こうした観光客やロングステイヤーとオランアスリの子供たちとの出会いの風景が書き込まれている。キャメロンハイランドおよびオランアスリをキーワードとして検索すると、旅行代理店によるジャングルツアー、4WD アドヴェンチャーなどのツアー広告や旅行体験記の書き込み、トンカットアリ情報など、実に冗舌なほどに、外部者からのキャメロンハイランドの「観光オランアスリ」あるいは「オランアスリ観光」に関する情報が満載されている。

引用・参考文献

アパデュライ

- 2002 「グローバル文化経済における乖離構造と差異」（門田健一 訳）『思想』933：5～31（原著 Arjun Appadurai, “Disjuncture and Difference in the Global Cultural Economy”, *Public Culture* 2-2, 1990, 1-23; Chapter 2 in *Modernity at Large: Cultural Dimensions of Globalization*, University of Minesota Press, 1996）
- 高寺奎一郎
2004 『貧困克服のためのツーリズム』 古今書院。
- 藤巻正己
1998 「クアラルンプルの生きられたスコッター・カンボン—1980年代マレーシア都市下層社会の風景—」（江口信清編 『「貧困の文化」再考』 有斐閣）：113～176。
2000a 「1990年代クアラルンプルのスコッター問題と再定住政策」（大阪市立大学経済研究所監修、生田真人・松澤俊雄 編 『アジアの大都市〔3〕クアラルンプル・シンガポール』 日本評論社）：91～120。
2000b 「クアラルンプル大都市地域における外国系スコッター」『立命館地理学』12: 19～42。
2001 「クアラルンプルの都市美化政策とスコッター—新聞記事に描かれたスコッター・イメージ—」（藤巻正己 編 『生活世界としての「スラム」—外部者の言説・住民の肉声—』 古今書院）：60～93。
2003 「熱帯のメトロポリス クアラルンプル断章—スコッター都市から世界都市へ?—」『地域研究論集』（国立民族博物館地域研究交流企画センター編集・平凡社刊）5-2：79～93。
2006 「グローバル化するクアラルンプル周辺地域のオランアスリ—半島マレーシア先住社会の現在と彼らの場所をめぐるせめぎあい—」『立命館文学』593: 69～91。
2007 「トランスナショナル都市化するクアラルンプル—変貌する熱帯のメトロポリスの民族景観—」『立命館地理学』19：1～19。
- ラジェンドラン＝ムース
2002 「マレーシアにおける先住民族とその疎外政策」（ラジェンドラン＝ムース 『マレーシアの社会と社会福祉』 明石書店）：101～148。
- Bunnel, T.
2004 “Re-Viewing MSC: Critical Geographies of Mahathir’ s High-Tech Push”, Welsh, B. ed., *Reflections: The Mahathir Years*, Johns Hopkins University: 406-416.
2004 *Malaysia, Modernity and the Multimedia Super Corridor; A Critical Geography of Intelligent Landscapes*, Routledge Curzon.
- Bunnel, T. and Nah, A.M.
2004 “Counter-global Cases for Place: Contesting Displacement in Globalising Kuala Lumpur Metropolitan Area”, *Urban Studies* 41-12: 2447-246.
- Fujimaki, M.
2003 “Squatter Settlements by Foreign Workers in The Kuala Lumpur Metropolitan

Area- A Preliminary Consideration- “(Umehara, H. ed., *Agrarian Transformation and Areal Differentiation in Globalizing Southeast Asia: Proceedings of RU-CAAS Symposium held at Rikkyo University on November 1-2, 2002*): 241-265.

Jabatan Perangkaan Malaysia

1997 *Profil Orang Asli di Semenanjung Malaysia*: Siri monograf Banci Penduduk No.3 (Deapartment of Statistics, Malaysia, *Profile of the Orang Asli in Peninsular Malaysia*: Population Census Monograph Series No.3)

Majilis Daerah Cameron Highlands dan Pihakberkuasa Perancang Tempatan Cameron Highlands

1996 *Rancangan Struktur Cameron Highlands dan Pihakberkuasa Perancang Tempatan Cameron Highlands: 1995-2020*, Jabatan Perancangan Bandar dan Desa Semenanjung Malaysia dan Pekarunding MSO & Associates Sdn. Bhd.

Nicholas, C.

2000 *The Orang Asli and the Contest for Resources: Indigenous Politics, Development and Identity in Peninsular Malaysia*, Center for Orang Asli Concerns.

Nicholas, C.

2004 “Mahathir’s Invisible Minority: The Orang Asli (Welsh, B. ed.: *Reflections: The Mahathir Years*, Johns Hopkins University) 220-230.

Norizan Md Nor and Suriati Ghazali

2004 The Economic and Socio-Cultural Impacts of Ecotourism on the Minority People in Cameron Highlands, Pahang, Malaysia: 1-15.

* 文中で略称した新聞名は以下の通りである。NST: *New Strait Times* (日刊紙)、Star: *The Star* (日刊紙)